時評

「食うもの、食われるもの」佐佐木定綱

この間、初めてイカを捌いた。ネットで捌き方を検索し、写真を見ながら包丁を入れた。内臓や軟骨を取りながら、イカとはこのような体の構造なのかと感嘆した。口を外すときに鳥肌が立つ。イカの口は丸くなっていて棘のような歯？がある（イカトンビ、カラストンビと呼ぶらしい）。それがおちょぼ口のようで人の口を思い出して、急に身震いがした。イカは炒めて食った。

「短歌研究」五月号で「現代の１０３人　エッセイ「男子厨房に入るとき」」という特集が組まれていた。

「食べる」ことも「厨房に入る」ことも意見は十人十色である。にわか料理男子としておもしろく読んだ。

特集の中で綾部光芳は大野誠夫『水源記』の「水槽の獄に腹匍ふ車海老油煮えたぎる鍋を視野とす」という歌を挙げ、「私たちは、グルメと言って美食を当然とする生活を続けている。しかし、生きものが食べられる立場にたって詠われる歌は驚くほど少ない」と述べている。

現代は飽食の時代と言われる。日本では食べ物がなくて困ることなどほとんどないといっていいだろう。

コンビニやファーストフードではいくらでも調理済みの料理が買えるし、スーパーでは牛も豚も鶏も肉の状態で売られ、魚も多くが切り身になっている。「魚の絵を描いてみて」と言われて切り身と開きの絵を描いた子がいたという話もあるほど、食用に解体される以前の生きものとの距離が離れているいま、食べられる側に立ってみることも意義のあることなのではないかと思う。

冒頭のイカになぜ身震いしたかと考えれば、それが紛れもない「死」だと認識したからである。物としてしか意識していなかったイカだが、その口から人間を想起した瞬間に、それは本質的な「死」となった。我々は（人間だけの話ではないが）死を食って生きている。文明が発達したところでそのサイクルは変わらない。

・みづからの五臓六腑を見たること一たびも無くレバ、ハツを食ふ

高野公彦（「短歌研究」五月号）

レバは肝臓、ハツは心臓。それぞれ焼き鳥の定番メニューだ。自らの中にもある内臓と同じ内臓を持った鶏のそれを食っている。鶏は死に、自らは生き、死を血肉に変えている。

動物の死となると、命の重さとか殺生とか、残酷とか可哀想とかの話題になるが、その問題の前に、人間もそこまで大きく変わらないのではないか。首を切られれば血が出て、皮を切れば肉と骨と内臓が出てくる。それは擬人でもなんでもないリアルである。

死は終わりでない。あらゆる形で乗り越えられるべきものである。生は死を取り込んで、生き延びねばならない。生と死はサイクルなのだ。

「飲食は人間の根源的な行為である。飲食を歌うということは、人間を歌うということである」とは「心の花」五月号での本田一弘の言葉である。食には食うものと食われるものが存在する。そしてそこにはどうしようもなく生と死がまとわりついている。見られにくい部分を歌うことの重要性を強く思った。